広報 おだわら

地域プラン特集号

平成元年1月

〒250 小田原市荻窪300番地
編集発行 小田原市役所企画調整部企画政策課

地域づくりのためのアプローチ
21世紀へのふるさとプラン案まとまる

わたしたちのまち小田原は、新しい時代、二十一世紀において大きな発展が期待できる都市、次代に生きる子や孫が誇ることのできるふるさとになることを目標に「おだわら21世紀プラン」をガイドブックにまちづくりを進めてきています。

「おだわら21世紀プラン」における基本的な考え方は、大きくは二つありますが、その一つは「小田原の特性を生かした個性的な魅力あるまちづくり」であり、もう一つは、そのまちづくりを「市民と行政との協働」で進めていこうということです。

この「市民と行政との協働のまちづくり」を推進していく上での一つの取組みが、現在進めています「地域プラン」の策定作業です。

今回そのプランが予定していました作業を経て案としてまとまりましたので、ここにお知らせするものです。

なお、紙面の都合上、図表やコラム欄は省略しましたが、ほぼ全文を掲載してありますので、昨年六月の広報「地域カルテ特集号」と合わせてご覧ください。

協働のまちづくりは関心の深い地域から

プランの目的

本市は、二十一世紀へ向けてのまちづくりの指標として「おだわら21世紀プラン」を定めていますが、これは小田原市全体の計画です。

また、まちづくりというものは行政だけで進められるものではなく、市民のみなさんと行政とがそれぞれの役割を認識し、お互いの信頼関係を築き上げていくことによって進められていくものです。

そのために、市民のみなさんが生活している自分たちの地域でのまちづくり、つまり地域づくり、地域活動がその原動力にならなければなりません。そして、その地域づくりが本市全体のまちづくりの方向と整合することによって、市民と行政とが歩調を合わせて「おだわら21世紀プラン」を推進していくことができると考えています。

「地域プラン」は、このように「市民と行政との協働のまちづくり」の一つの取組みであるわけですが、期待できる効果としては、行政側としては来る平成三年から準備に入る予定の後期基本計画の策定にあたって、地域の課題、将来イメージが明確になっていれば、原案づくりの段階で地域性を配慮することができることになります。また、市民のみなさんにとっては、自主的なまちづくりを進める際に、地域の、そして市全体のまちづくりと整合がとられた活動の指標としていただくことができるものと期待しているわけです。

策定の経過

「地域プラン」の策定にあたっては、市民のみなさんと行政との情報交換の中からみなさんにとって身近な地域の将来方向を探し出していこうという方針の下に、次のように作業を進めてきました。

まず、市民のみなさんに地域の現況をよく理解していただいて地域の課題というものを抽出してもらうために「地域カルテ」を作成しました。これは地域別の特性図ともいうべきもので、昭和六十年の国勢調査と都市計画基礎調査をベースに近年の各種統計調査資料を地域別に区分し図面化したものです。その一部については、昨年六月の広報「地域カルテ特集号」でお知らせしました。

この「地域カルテ」をスライド化するとともに、プラン策定の趣旨説明を兼ねて、昨年七月に地域別に地域のみなさんとの懇談会を開催しました。そこで発表された地域の意見、要望を基にプランの原案を作成し、昨年九月から十一月にかけて地域を実際に踏査しながら情報交換を行う形で地域探訪会を開催しました。

そして、原案に寄せられた意見、要望を再び検討し、まとめ上げたものが、今回の案であります。

この間、地域のみなさんの声をできるだけ集約するために、市民と職員との共同研修の受講者のみなさんによって「地域を考える懇話会」を結成していただき、プランづくりに協力していただいたり、「市民アンケート調査」「わたしの提案」を分析しその反映にも心掛けました。

なお、七月の地域懇談会は一般市民の方を対象に行ったもので、六会場で参加者は一七四人でした。九月から十一月にかけての地域探訪会は自治会長と「地域を考える懇話会」のみなさんを対象に七回にわたって行い、参加者は二五〇人でした。ここにご参加いただいたみなさんに厚くお礼申し上げます。

地域の一体感から将来イメージを共有

プランの構成

「地域プラン」は、二面から四面にかけて掲載しましたとおり、六つの地域ごとに次の四つの項目で構成してあります。

1 地域の姿

ここでは、それぞれの地域の区分設定というものを、その「歴史的歩み」と「地形的状況」から理解していただくとともに、地域の一体性を感じ取っていただこうとするものです。

2 地域の特性

ここでは、それぞれの地域の現況について近年の各種統計調査等を地域ごとに「人口」「土地利用」「産業」「公共施設の状況」「コミュニティ意識」の五つに分類整理して、そこから地域の特徴と思われるものを引き出し、他の地域との相違や独自性というものを見出そうとしたものです。

3 地域の課題

ここでは、「地域の特性」を踏まえ、地域懇談会と地域探訪会において発表された意見、要望を中心に、「市民アンケート調査」「わたしの提案」などから地域ごとに市民のみなさんの考えや気持ちというものを集約し、地域の課題として特筆すべきものについて抽出したものです。

4 地域の方向性

ここでは、前述の「地域の課題」を前提にして、それぞれの地域が小田原市全体の中でどういう役割、位置付けを有し、どうまちづくりを進めていくべきかを、地域の「将来イメージ」と課題解決のための「望まれる対策」の二つに分けて記述したものです。

地域の方向性

このプランのポイントは、それぞれの地域の最後に記述してあります「地域の方向性」といえます。

「地域の方向性」は、地域の「将来イメージ」と「望まれる対策」の二つに分けてあります。

「将来イメージ」については、簡略な表現になっていますが、そのことによって地域の将来イメージを限定することなく広げていってもらおうという考えによるものです。

「望まれる対策」については、沢山ある地域の問題の中から抽出された「地域の課題」というものを解決していくために必要であろうと考える対策を掲げたものです。

特に注意していただきたいことは、「望まれる対策」は行政が今後いろいろな計画づくりをする上での基盤となるものですが、行政計画そのものではありません。地域の将来イメージを実現していく上でそのために必要な対策について、地域のみなさんと行政とが共通認識しておこうという段階のものです。

したがって、行政はこれに沿って計画づくりや施策の展開をしていくことになりますし、地域のみなさんの自主的な地域活動もこの方向で推進していただこうというものであります。

市民性を配慮

このプランは、行政が策定し市民に示すプランではなく、市民のみなさんが地域づくりについて考えていただく、活動を起こしていただくためのものですから、市民のみなさんにとって親しみやすいもの、理解しやすいものとすることに心掛けました。

今回の広報特集号では紙面の都合上割愛しましたが、それぞれの地域ごとの四つの項目のほかに、地域の話題となりそうな情報を「地域アラカルト」というコラム欄を設けて掲載しました。また、文章は平易さに心掛けましたが、「地域の特性」の項目においてどうしても専門用語を使用せざるを得ない部分もありましたので、「用語の説明」ページを設けて解説をしました。さらに、最終的には写真なども加えて読みやすいものにしていく予定であります。

地域の区分

地域を区分するに際しては、基本的には地域活動の基礎単位である自治会、さらに旧村落単位である連合自治会を分割しないこと、地域における生活圏である小・中学校の通学区域を分割しないことに留意して設定したものです。

地域区分の基準としては、

1 地理的・地形的条件
2 歴史的背景(合併経緯等)
3 大字・自治会の範囲
4 将来土地利用構想
5 今後の発展の同一性

の五つを基に、次の六地域を設定しました。

◆**片浦地域**(片浦連合自治会の区域)
◆**中央地域**(早川・大窪・緑・新玉・万年・幸・十字・山王網一色・足柄・芦子・二川・久野連合自治会の区域)
◆**富水・桜井地域**(富水・東富水・桜井連合自治会の区域)
◆**川東・南部地域**(下府中・酒匂・国府津連合自治会の区域)
◆**川東・北部地域**(豊川・上府中・曽我・下曽我連合自治会の区域)
◆**橘地域**(橘南・橘北連合自治会の区域)

わたしの提案制度で意見をお寄せください

地域プランについては、引き続き市民のみなさんのご意見、ご提言をいただき修正作業を行っていきます。

地域づくりを進める上でみなさんがこの案について感じられたことや、地域の一体感、愛着感を形成していく上で必要な地域の埋もれている特性や話題を「わたしの提案」制度を通じてお寄せ願います。

「わたしの提案」のはがきは、各支所・連絡所又は各郵便局にありますのでご利用ください。

片浦地域

地域の姿

＊歴史的歩み

この地域を含む早川以南の相模の国は、平安時代初期までは、垂水郷と呼ばれていました。その後、橘地域の豪族・中村宗平の次男土肥実平が領するところとなって、以来、土肥郷と呼ばれるようになりました。治承四年（一一八〇年）、源頼朝が平家討伐の挙兵をし、この地域の石橋地区に陣したことから、世にいう「石橋山合戦」が起こりました。頼朝は、この戦いに敗れはしましたが、土肥実平等の助けによってその後、鎌倉に幕府を開き、わが国の歴史における中世の幕を開いたのであります。

室町時代は、小田原に本拠を構えた大森氏の支配下にありましたが、北條早雲の小田原城占拠によって後北條氏の領地になりました。「片浦」の地名は、この後北條氏の時代から用いられました。

後北條氏の滅亡後、江戸時代は、小田原藩領となり、根府川に関所が設けられたため、周辺の山々は要害山として管理が厳しく、開発は禁じられていました。

明治時代に入って、小田原県、足柄県、さらに神奈川県に編入されると同時に、早川、石橋、米神、根府川、江之浦の五か村は組合村となりました。

その後、大正二年（一九一三年）に、組合村から石橋、米神、根府川、江之浦の四か村が分離、合併して片浦村となり、さらに、昭和二十九年（一九五四年）に小田原市に合併し、現在に至っています。

＊地形的状況

この地域は、箱根連山の南端にあり、相模湾に面しているため、断がいとなって海に落ち込んでいます。そのため、平地がないことから水田もほとんどなく、山ひだに営まれている各集落は規模も大きくなることができず、ほぼ限界に達しています。

江之浦漁港での地域要望説明

しかし、気候は海洋性のため、夏季は炎暑を和らげ、冬季は季節風を箱根連山がさえぎり、気温の年較差も大きくなく平均気温は十五～十六度となっています。こうした条件は、果樹栽培としての好適地となっていて、みかん栽培が盛んです。

みかんが色付くころは、山の緑と海の青との対照が美しく南国的な景観を描き出しており、地中海のリヴィエラに似ているといわれています。

地域の特性

＊人口

人口は徐々に減少してきていますが、世帯数はほぼ横ばい状況ですので、減少傾向はあるところで一段落し、今後は横ばいに推移すると見込まれます。

一世帯の平均人員は四・二人と、市の平均人員の三・三人より多くなっています。

また、年齢別には若年層が減少し、老年人口が増加しており、老年人口比率は一五・一%で市平均の九・九%を大きく上回り、市内でも最も高い地域です。人口は、ほぼ四つの集落に集中していますが、人口密度はほとんどがヘクタール当たり二十人未満となっています。

＊土地利用

地域のほぼ全域が山林と傾斜地で、土地利用も住宅や道路といった都市的な利用がされている面積は、七・六%に過ぎません。

海岸線から丘陵地にかけての農地は、農業振興地域及び農用地に指定されており、また地域の六割を占める山林には、県自然環境保全地域や保安林が含まれており、緑豊かな自然を保つため自然的土地利用を図る区域に区分されています。

また、海岸線一帯は風致地区に指定されています。

本地域は現在全域が市街化調整区域ですが、既存の集落を含む国道一三五号沿いの観光開発区域、一四九・六ヘクタールについては、都市的土地利用を図る区域に区分されています。

＊産業

産業別就業者数の割合は、第一次産業が三五・一%と、市平均の四・九%と比較すると極めて高く、第二次産業が二一・四%、第三次産業が四三・五%となっています。

農業は田が全くないため、傾斜地を利用してのみかん等、果樹栽培がほとんどです。また、漁業従事者が二十人あり、定置網漁業のほかに養殖漁業が実施されています。

本地域には商・工業施設がありませんので、ほとんどが他の地域に流出していることになります。

＊公共施設の状況

特徴的な施設としては、地形的条件から片浦診療所があるほか、石橋、米神、江之浦にそれぞれ第一種の漁港があります。

そのほか、小学校・中学校が各一校、保育園が二園、郵便局が二局、警察駐在所が一か所あります。

＊コミュニティ意識

市民アンケート調査の結果では、地域への居住年数は市内で最も長期化していることがうかがわれます。

また、地域の住み良さについての評価は総じて良好で、否定的なものは少なく、特に定住意識は極めて高くなっています。

地域活動への参加意向については「参加しない」という回答は皆無で、近所づきあいの評価などから推測されることは、市内でも際立って緊密な地域社会が形成されているといえます。

地域の課題

山と海という豊かな自然と多くの歴史的遺産を有している個性的な地域ですが、地形的に山間部は急傾斜地が多く、海岸は磯浜で、また法的な土地利用上の規制もあって一般的には開発が難しい地域といえます。

こうした地形的条件のため、日常の買物や交通、子供の遊び場など生活上の利便性が悪く、特に道路交通は国道一三五号のみで伊豆方面への通過車両が極めて多く、夏季及び休日の交通渋滞が慢性化しています。

さらに、地域の基幹産業ともいえるみかん経営は不振が続いており、林業、漁業とともにその振興を図りながら観光的な結び付きによる地域の活性化が最大の課題であります。

地域の方向性

＊将来イメージ

豊かな自然環境を保全しながらリゾート的活用を図るため、地域を開発整備するとともに、良好な地域の人間関係を保ち続けることによって、うるおいとやすらぎを求める人々が、訪れ、居住する地域の形成を目指します。

＊望まれる対策

(1)農業の振興
都市の人々との交流によるみかん栽培等の観光農園化や景観を生かしての樹園公園等の整備が望まれます。

(2)丘陵地の活用
自然と景観を生かして丘陵地でのレクリエーション施設の開発が望まれます。

(3)海の利用の拡充
漁港を核とした漁業の振興を図りながら、日本のリヴィエラとして海岸及び海面のレクリエーション的利用の拡充が望まれます。

(4)歴史文化の高揚
石橋山古戦場など、地域の歴史的遺産の発掘・宣伝に努めるとともに、地域の伝統と新しい文化を守り創造していくことが望まれます。

(5)道路網の整備
土地利用の有効化を図るため、道路網の再整備が望まれます。

(6)生活の利便性の向上
水の安定供給をはじめ生活環境の利便性を向上することが望まれます。

(7)地域活動の推進
地域のコミュニティ意識を一層高めるとともに、地域活動の拠点となる施設を整備することが望まれます。

中央地域

地域の姿

＊歴史的歩み

この地域は、十二世紀に早川庄として荘園化し、その荘域は早川流域から酒匂川の西、狩川の南辺まで広がり、その中心は山王川流域であったと考えられています。

室町時代、大森氏が駿河国から移って城を築いたとき、小田原は初めて武家豪族の本拠地となりました。

それから約八十年後、明応四年（一四九五年）に北條早雲が大森氏を追って小田原を築城と小田原のまちづくりが行われました。以来約百年間、後北條氏の時代は地方文化の一大中心地として繁栄しました。しかし、天正十八年（一五九〇年）には豊臣秀吉の小田原攻めに降伏し、後北條氏の治世も終わりました。

江戸時代は大久保氏の領するところとなり、一時、幕府の代官所管や阿部氏、稲葉氏の領するときもありましたが、明治維新までその大部分は大久保氏の城下町、箱根を控えての東海道の宿場町として、近隣の経済、文化の中心地となりました。

明治時代に入って、小田原県、足柄県、さらに神奈川県の所管となり小田原支庁が置かれましたが、後に廃され、また明治二十一年（一八八八年）東海道線が国府津から北に折れて御殿場経由となったことにより交通上の要衝としての地位も失いました。

しかし、大正九年（一九二〇年）に小田原駅の開業、昭和九年（一九三四年）の丹那トンネルの開通によって東海道本線の主要駅になるに及んで交通の中心地としての地位を回復しました。

その後、昭和十五年（一九四〇年）小田原町、足柄町、大窪村、早川村と酒匂村の山王原・網一色を分割して市制を施行し、小田原市となり現在に至っています。

＊地形的状況

この地域は、南は相模湾に面し、東は酒匂川に、さらに狩川との合流地点から北部は多古丘陵によって足柄平野から隔てられ、西部は箱根外輪山に連なっており、西部山地の西北端・明星ヶ岳と西南端・白銀山との間を早川が流れ相模湾に注いでいます。

全体的には、箱根外輪山が相模湾に傾斜している地形ですが、海岸沿いがやや高く酒匂川寄りに低くなっているため、小田原城跡付近の市街地が最も低い地点となっています。

気候は温暖で、東京と比べて夏涼冬暖で、南国的植物もあって休養地としての背景をつくり出しており、景観の良さ、名所旧跡の豊富さ、交通の利便性とによって理想的な居住環境を形成しています。

●早川のビランジュ
暖かい地方の植物で、わ[illegible]

地域の特性

＊人口

昭和三十五年から六十年の二十五年間に、人口はやや減少しましたが、世帯数は、一・四倍に増えました。

これは、主として郊外への転居と核家族化によるもので、一世帯の平均人員は三・一人と、市の平均人員の三・三人より少なくなっています。

年齢別では、老年人口比率が一二・〇%で市平均の九・九%よりも多く、年少人口比率は、一九・二%で市平均の二一・一%よりも少なく、比較的高齢化が進んでいる地域です。

人口密度は、栄町、本町、浜町、南町、扇町あたりの市街地がヘクタール当たり二百人以上と最も高くなっていますが、おおむねこのあたりでは人口が減少傾向にあります。

＊土地利用

地域の西部山岳・丘陵地は、ほとんどが山林で、自然公園区域（富士箱根伊豆国立公園）、県自然環境保全地域、保安林が指定されており、自然的土地利用を図る区域に区分されています。

また、比較的低地の丘陵部は、農業的土地利用を図る区域に区分されています。

平野部は、大部分が市街化区域で面積は約一、〇三二ヘクタールですが、周辺の一部を取り込んで都市的土地利用を図る区域に区分されています。小田原駅周辺及び国道一号沿いに商業施設が、酒匂川右岸を中心に工場が立地し、その周辺に住宅地が広がり、一連の市街地を形成しています。また、小田原城跡から城山周辺地区及び海岸線は風致地区に、さらに、海岸線は海岸保全区域に指定されています。

＊産業

産業別就業者数の割合は、

市平均の五七・一%よりも上回っています。これは全市の事業所数のうち、当地域に約六割の事業所が集中していることによるものと思われます。

丘陵部では傾斜地を利用してみかんを主とした果樹栽培が行われ、また、山岳部では林業も営まれています。

小田原漁港の周辺には、水産市場をはじめ水産加工工場などの水産関連施設が立地し、小田原駅東口には大型店舗を中心に多くの商業施設が集積し、広域的な中心商業地を形成し、国道一号及び国道一三五号沿いでは沿道型商業地が形成されています。酒匂川右岸沿いには、化学工業などの大規模工場をはじめ、中小の工場が立地しています。

＊公共施設の状況

この地域は、歴史的な背景と交通・地理的条件によって、市役所、警察署、税務署、保健所、消防署、市立病院、市民会館、小田原駅など主要な公共施設のほとんどが集中しています。

特徴的な施設としては、早川の小田原漁港・水産市場、都市公園としての小田原城址及び城山公園、久野の斎場・清掃工場・緑化センター、寿町の下水道終末処理場などがあります。

建設中の石垣山農道を見学

＊コミュニティ意識

市民アンケート調査の結果では、市街地の形成が古いこともあって、近隣関係における親密度は市の平均よりも高くなっています。

また、地域の住み良さについては、中心市街地に位置することから都市としての利便性についての評価は最も高く、定住意識も片浦地域に次いで高くなっています。

ついては半数以上の人が消極的ですが、参加している団体は自治会をはじめ多分野にわたっており、バラエティに富んだ地域活動が行われています。

地域の課題

本市の玄関口である小田原駅は、鉄道やバスが集中し、多くの人々に利用され、その周辺は高度な商業地区となっていますが、近年、道路の交通渋滞等もあって全体的に購買力の伸びは低迷してきています。

小田原駅の近くには小田原城跡もあり本市のシンボルゾーンといえますが、個性的な魅力に欠け公共施設の配置など都市機能も十分ではなく、また、自然と歴史遺産の豊富な西部丘陵地から暖かい相模湾の利用などまだ活用すべき所が多くあります。

また、交通等の居住条件は優れていますが、市街地を流れる河川の浄化や工業地と混在する住宅地における生活環境の向上が必要です。

さらに、本市を訪れる多く

感じるような地域の人々の心のつながりを再認識していくことが必要です。

地域の方向性

＊将来イメージ

豊かな自然環境に囲まれ、伝統と新しい文化が調和した城下町の雰囲気が漂うとともに、本市の中心地域として都市機能が充実した魅力ある都市空間の創出を目指します。

＊望まれる対策

(1)シンボルゾーンの整備
小田原城跡と小田原駅を中心に歴史と景観に配慮した公共施設等の整備を進め、本市のシンボルゾーンにふさわしい空間の創出が望まれます。

(2)中心市街地の整備
再開発事業等によって駅周辺の利便性を高めるとともに、魅力ある商業空間を再構築していくことが望まれます。

(3)丘陵地の活用
西部丘陵地一帯の自然と歴史を生かして、歴史公園の整備や知的体験ができるレクリエーション機能を充実することが望まれます。

(4)海岸の保全と漁港の整備
のための整備を促進するとともに、親水機能の向上を図ることが望まれます。また、小田原漁港は海洋レクリエーション機能にも配慮した整備拡充が望まれます。

(5)道路網の整備
交通渋滞を解消するための幹線道路の整備を進めるとともに、周辺環境に配慮した生活道路の整備が望まれます。

(6)居住環境の整備
住宅地は生活環境の整備を進めるとともに、現在良好な居住環境の地区は、景観に配慮しながら、それを保全していくことが望まれます。

(7)工業地周辺環境の向上
大規模工場等の緑化を促進するとともに、住工混在地区での景観や周辺環境の向上が望まれます。

(8)河川アメニティの向上
早川、山王川、酒匂川などの河川の浄化を進めるとともに、親水機能の向上が望まれます。

(9)地域活動の推進
多彩な地域活動や文化活動を一層活性化するとともに、多くの人々が訪れることから

ていくことが望まれます。

富水・桜井地域

地域の姿

＊ 歴史的歩み

鎌倉時代の初めころには、桜井地区は現大井町一帯を中心とした大井庄に含まれ、富水地区は足柄下郡内の土肥氏の領する早川庄の一部でありました。

地域内の大字名の多くは、茅草の茂った地を開いて茅間（栢山）と呼んだとか、開拓された地に居着いたので新屋と呼ばれるようになったとか、酒匂川の乱流と深いかかわりを持っています。

室町時代は、小田原に本拠を構えた大森氏の支配下にありましたが、北條早雲の小田原占拠によって後北條氏の領地になりました。

後北條氏以来、足柄平野は水田として開発され豊かな土地となりましたが、江戸時代、宝永四年（一七〇七年）の富士山噴火の被害は大きく、さらに降灰後の酒匂川出水によって多くの田地が流出するという災害がたびたび起こりました。そうした中から本市が誇る偉人・二宮尊徳が生まれ育ったのであります。

明治時代に入ると、小田原藩領から小田原県、足柄県、さらに神奈川県の所管となり、明治二十二年（一八八九年）の町村制によって桜井地区の二村が桜井村に、富水地区の十二村が富水村になりました。

その後、富水村は明治四十一年（一九〇八年）に久野村、二川村、蘆子村と合併し足柄村になり、昭和十五年（一九四〇年）には足柄町に、そして同年小田原町ほかと合併し小田原市になり、桜井村は昭和二十五年（一九五〇年）に小田原市に合併し、現在に至っています。

＊ 地形的状況

この地域は、狩川流域を中心に酒匂川を東境とし、北は開成町、西は南足柄市に続き、南西部は多古丘陵によって中央地域と区分されています。

地域は全体的に酒匂川と狩川のはんらん原の一部であるため、耕地として地味豊かな平坦な地であるとともに水量も豊かでかんがいの便が極めて良く、古くから水田地帯として開かれています。

気候は温暖で、景観も箱根外輪山越しの富士山や丹沢山塊、曽我丘陵の遠望と、酒匂川、狩川をはじめとする多くの水脈に囲まれた居住環境としての良好性によって近年住宅地として開かれつつあります。

地域の特性

＊ 人口

人口と世帯数は、特に昭和三十五年から四十五年にかけて急増し、その後も増加を続けています。昭和三十五年から六十年の二十五年間に、人口は三・四倍、世帯数は四・六倍に増えました。

一世帯の平均人員は、三・四人と、市の平均人員の三・三人とほぼ同じです。

年齢別では、老年人口比率が八・二％で、市平均の九・九％よりも少なく、年少人口比率も二二・〇％で市平均の二一・一％よりもわずかに多く、比較的若い人が多い地域といえます。

人口密度は、蓮正寺地区が一ヘクタール当たり百五十人ですが、その他の地区は三十人～百人程度となっています。

＊ 土地利用

地域の大部分は、酒匂川と狩川に挟まれた平野が占めており、田や畑などの農地が四〇・八％、宅地が二五・三％となっています。

市街化区域は約五一二ヘクタールで地域の五三％を占めていますが、周辺の一部及び栢山と蓮正寺の特定保留区域を取り込んで都市的土地利用を図る区域に区分されています。

桜井地区の一部は、将来も優良な農地として残すため、農業的土地利用を図る区域に区分されています。

＊ 産業

産業別就業者数の割合は、第一次産業が三・二％、第二次産業が三九・五％、第三次産業が五七・三％で、市平均とほぼ同じ状況です。

酒匂川と狩川に挟まれた平野部では、豊富な用水を利用した水稲や生鮮野菜が栽培されています。

また、平野部では豊富な地下水を利用した化学関連工場など比較的大きな工場も点在しています。

栢山駅、富水駅、螢田駅の駅前は、日用品を主体とした中小商店が分布し、県道・栢山停車場塚原線沿線では、沿道型商業の立地がみられます。

＊ 公共施設の状況

この地域の学校施設は、小学校四校、中学校二校がありますが、人口の急増に伴い、このうち桜井、富水両小学校を除く四校は、昭和四十年以降に開校したものです。

特徴的な施設としては、郷土の偉人・二宮尊徳をたたえる尊徳記念館が栢山にあるほか、蓮正寺に軽費老人ホームと梅香園があります。

＊ コミュニティ意識

市民アンケート調査の結果では、この地域は「サラリーマン」家庭が多く、年齢構成も比較的若いためか、近隣関係は「あいさつ程度」というのが多く、「親密なつきあい」というのはあまり高くありません。

しかし、小田急線、大雄山線沿いの住宅地として生活上の利便性の評価は高く、地域への定住意識は、市平均並みであり、地域活動への参加意向は半数以上が積極的であり、むしろ市平均を上回っています。

地域の課題

かつては自噴の井戸が各所で見られ、水路が網目のように走る地域でしたが、交通の利便性が高いことから、昭和三十年代から四十年代にかけて水田地帯が急速に宅地化しました。そのため、農道がそのまま生活道路に利用されたり、下水道が未整備のため中小河川が汚濁したり、公園等の広場がないなど、都市基盤整備の遅れが目立っています。

その一方、市街化調整区域を中心に農地も多く、田園風景が残っています。

桜井地区には尊徳生誕二百年記念に尊徳記念館が完成しましたが、尊徳生誕の地としての住民の意識はまだ十分浸透しているとはいえません。

また、住民の近隣関係も形式化の傾向が強く地域活動にも今ひとつ盛り上がりが見られません。

酒匂川堤での地域要望説明

地域の方向性

＊ 将来イメージ

尊徳生誕の地として清らかな川や緑豊かな田園風景を守り育てながら、都市機能が整備された活力とゆとりが感じられる地域の形成を目指します。

＊ 望まれる対策

(1)良好な住宅地の形成
下水道事業の推進をはじめ居住環境の向上に努めるとともに、良好な住宅地を形成するために計画的な面的整備を図ることが望まれます。

(2)農業と住環境との調和
農業生産環境と住環境両面の向上と調和を図るため、優良農地を保全していくことが望まれます。

(3)公園等の整備
身近な遊び場や公園の整備とともに、健康のための施設整備が望まれます。

(4)尊徳遺業の継承と顕彰
二宮尊徳の遺業の継承と顕彰を図るとともに、遺跡を整備することによって、「尊徳の里」としての意識の高揚を図ることが望まれます。

(5)道路網の整備
幹線道路及びこれらと連携する生活道路網を周辺環境に配慮しながら整備することが望まれます。また、駅周辺の交通混雑の解消が望まれます。

(6)河川アメニティの向上
狩川、仙了川、酒匂川をはじめ中小河川の浄化を進めるとともに、親水機能の向上を図ることが望まれます。

(7)地域活動の推進
地域コミュニティの強化と地域活動の活性化を図るとともに、活動の拠点となる施設を整備することが望まれます。

川東・南部地域

地域の姿

＊ 歴史的歩み

平安時代、東国の官道（東海道）が足柄峠から国府（現大磯町・国府本郷）へと続いており、国府津は、相模国の国府の海辺が船の便に悪いため国府の津（港）として海陸の交通の要地でありました。

鎌倉時代に入ると東海道は箱根越えが本道となり、足柄平野の海浜を通ることになり、小田原宿や酒匂宿が形成されるようになりました。

酒匂海岸の浸食状況を見学

室町時代は、小田原に本拠を構えた大森氏の支配下にありましたが、北條早雲の小田原占拠によって後北條氏の領地となりました。以後、江戸時代は小田原城主の城付地として小田原藩領となり、一時期を除き大久保氏の支配するところとなりました。

江戸時代は、国府津、小八幡、酒匂村では農業と漁業が営まれ、村は岡と浜に分けられていました。下府中地区は、後北條氏以来進められた新田開発によって鴨宮村を中心に形成されたものです。

明治時代に入ると、小田原藩領から小田原県、足柄県、さらに神奈川県の所管となり、明治二十二年（一八八九年）の町村制によって酒匂地区の四村は酒匂村に、下府中地区の七村は下府中村になりました。そうした中で国府津は、明治二十年（一八八七年）に東海道線が新橋・国府津間に開通し、再び交通の要衝としての位置を占め、大正十三年（一九二四年）に単独で町制を施行しました。

その後、昭和十五年（一九四〇年）には、酒匂村のうち酒匂川右岸の山王原・網一色が分村して小田原市となり、昭和十七年（一九四二年）に酒匂村が町制を施行し、昭和二十三年（一九四八年）に国府津町が田島村と合併しました。さらに、下府中村は昭和二十三年に、国府津町と酒匂町は昭和二十九年（一九五四年）に小田原市に合併し、現在に至っています。

＊ 地形的状況

この地域は、足柄平野が相模湾と接するところであり、酒匂川を西境とし、南に相模湾、東は曽我丘陵によって橘地域と区分され、北は足柄平野を東西に横断する国道二七一号を境として川東・北部地域に続いています。

国府津地区の東端が曽我丘陵の南麓地にあるほかは、全体的には酒匂川はんらん原で森戸川以西は平坦地となっており、相模湾に面した国府津、小八幡、酒匂地区には漁場が設けられています。

気候は温暖ですが、ことに冬は相模湾に南面していることから適度な湿気により暖かく、居住環境として良好な条件を有しています。

地域の特性

＊ 人口

人口、世帯数ともに年々増加してきており、昭和三十五年から六十年の二十五年間に、人口は一・八倍、世帯数は二・六倍に増えました。

一世帯の平均人員は三・二人で市の平均とほぼ同じです。

年齢別では、老年人口比率が八・〇％で市の平均の九・九％を大きく下回り全市で最も少なく、また、年少人口比率も二三・四％（市平均二一・一％）と最も多く、若い人が多い地域といえます。

人口密度は、国道一号沿いと鴨宮駅周辺がヘクタール当たり百五十人以上ですが、それ以外の地区はほとんど六十～百人となっています。

＊ 土地利用

地域の平野部は大部分が市街化区域で、面積は約七九六ヘクタールで地域の七四％を占めています。飯泉地区には、現在は市街化調整区域ですが将来は住宅地として整備しようとする住居系の特定保留区域がありますが、これを取り込んで都市的土地利用を図る区域に区分されています。

現在、住宅地が二四・六％、工業地が九・九％、商業地が三・七％ですが、特に工業・商業の集積が高い地域となっています。

また、海岸一帯は風致地区と海岸保全区域の指定がされています。

＊ 産業

産業別就業者の割合は、第一次産業が一・八％、第二次産業が四三・六％、第三次産業が五四・六％ですが、特に第二次産業は市平均の三八・〇％を上回っています。これはこの地域の土地利用の現況が工業地が九・九％と、市の中で最も工業の集積している地域であることによるものと考えられます。

都市計画道路・飯泉国府津線や酒匂永塚線沿道に比較的大規模な商店が点在し、地域外からの自動車による買物客が訪れています。また、鴨宮駅北口や国府津駅前、国道一号沿いには、日用品を中心とした商店が分布しています。

＊ 公共施設の状況

特徴的な施設としては、酒匂川流域下水道の終末処理場が西酒匂に、市水道の浄水場が高田に、また、青果物の卸売市場が酒匂にあります。

そのほか、この地域の特徴である工業地としての先駆となりました大蔵省印刷局の工場があります。

＊ コミュニティ意識

市民アンケート調査の結果では、年齢層が若いこともあって、隣近所とのつきあいにおいて「親密なつきあい」の割合は、全市の中では低い地域となっています。

また、生活環境については、全体的には比較的良い評価が多く、定住意識も「ずっと住み続けたい」というのが六〇％を超えてはいますが、市平均の六四・七％と比較すると低い割合となっています。

地域活動への参加の意向は、半数以上の人が消極的で、参加意向が四五・四％というのは全市的にも低い割合となっています。

地域の課題

この地域は、鉄道交通の歴史を物語る地域であるとともに、川東地域における中心的役割を果たすべき位置にあります。

市内の中でも比較的大規模な工場が集積しているとともに、新しい商業地としての表情も見せはじめており、本市の経済活動に大きく貢献していますが、そのことが道路交通の面で渋滞を招く一因ともなっています。

国道一号沿いの、古い街並み、鴨宮駅南部一帯の新しい住宅地、さらに、飯泉地区には将来整備の見通しが立った時点で住宅地にしようとする区域があるなど、計画的な生活環境の整備が必要です。

海岸線は砂浜の浸食が見られ、景観や防災の面から対策が求められています。また、人口の流動が著しい地域であるため住民の近隣関係の親密度が相対的に低いことも課題の一つといえます。

地域の方向性

＊ 将来イメージ

川東地域における中心地として都市機能が整備され、良好な環境の住宅地や活力ある商業地、景観に配慮した工場地が共存する生き生きとした地域の形成を目指します。

＊ 望まれる対策

(1)公共施設の整備
川東地域の中心としての公共施設の整備を図るとともに、地域活動の拠点となる施設を整備することが望まれます。

(2)良好な住宅地の形成
下水道事業の推進をはじめ居住環境の向上に努めるとともに、良好な住宅地を形成するために計画的な面的整備を図ることが望まれます。

(3)商業空間の創出
再開発等の手法により良好な商業空間を創出するとともに、駅周辺の自転車対策を推進することが望まれます。

(4)工業地の周辺環境の向上
大規模工場等の緑化をはじめ工業地における景観や周辺環境の向上を促進することが望まれます。

(5)公園の整備
鉄道用地の有効利用などによる公園の整備が望まれます。

(6)道路網の整備
幹線道路及びこれらと連携した生活道路網を周辺環境に配慮しながら整備することが望まれます。

(7)河川アメニティの向上
酒匂川、森戸川などの河川の浄化を進めるとともに、親水機能の向上を図ることが望まれます。

(8)海岸の保全
海岸は浸食及び災害の防止のための整備を促進するとともに、親水機能の向上を図ることが望まれます。

(9)地域活動の推進
地域コミュニティの強化と地域活動の活性化を図るとともに、地域に根付いた新しい文化の創造が望まれます。

川東・北部地域

地域の姿

＊歴史的歩み

この地域は、平安時代、足柄峠を越え国府津へ出る東国の官道の道筋に当たっており、千代台地から廃寺跡が発掘されたことによって、足柄下郡の中心があったのではないかと考えられています。

鎌倉時代の初めごろから、曽我、下曽我地区は曽我庄、上府中地区は大友庄、豊川地区は成田庄に属し、曽我庄は曽我兄弟の継父で知られる曽我祐信の曽我氏に、大友庄は後に豊後国を本拠とした大名として有名な大友氏に、また成田庄は土肥実平の子孫で後に安芸国に移った小早川氏の庶子家によって支配されていました。

室町時代は、大森氏の支配下にありましたが、北條早雲の小田原占拠によって後北條氏の領地となりました。以後、江戸時代は小田原城主の城付地として小田原藩領となり、一時期を除き大久保氏の支配するところとなりました。

江戸時代には、酒匂堰が開削されるなど足柄平野の開発が進み豊かな土地となりましたが、宝永四年（一七〇七年）の富士噴火の被害は大きく、さらに降灰後の酒匂川の出水によって田地が流出する災害が度々起こりました。

明治時代に入ると、小田原藩領から小田原県、足柄県、さらに神奈川県の所管となり、明治二十二年（一八八九年）町村制によって曽我地区の六村（うち二村は現在大井町）が曽我村に、下曽我地区の四村は下曽我村に、上府中地区の七村が上府中村に、豊川地区の三村が豊川村になりました。

その後、豊川村、上府中村、下曽我村は、昭和二十九年（一九五四年）に小田原市に合併し、曽我村も昭和三十一年（一九五六年）に分村して小田原市に合併し、現在に至っています。

＊地形的状況

この地域は、北は大井町に接し、西は酒匂川を境とし、南は、足柄平野を東西に横断する国道二七一号を境とし川東・南部地域に続き、東は曽我丘陵で区分されています。

全体的には、曽我丘陵から酒匂川流域に段丘をつくりながら傾斜し、曽我丘陵の南面は柑橘、麓は梅などの果樹栽培の適地であり、酒匂川流域の平地は南流する小河川及び用水によって水田地帯となっています。

気候は四季を通じて温和で、富士山を遠望できる景観とともに、都市近郊の田園地帯として得がたい魅力をつくり出しています。

地域の特性

＊人口

人口、世帯数とも増加を続けてきており、昭和三十五年から六十年の二十五年間に、人口は二倍、世帯数は三倍に増加しました。

一世帯の平均人員は、三・七人と、市の平均人員の三・三人より多くなっています。

年齢別では老年人口比率が九・三％(市平均九・九％)、生産年齢人口比率が六八・四％(市平均六九・〇％)、年少人口比率が二二・四％(市平均二一・一％)と本市の平均に最も近い構成となっている地域です。

人口密度は、大部分がヘクタール当たり六十人未満となっています。

＊土地利用

地域の五四％が農地となっており、農業振興地域及び農用地に指定されています。

このうち農用地に指定されている地区一帯は、農業的土地利用を図る地域に区分されています。

この地域の市街化区域は、約二六六ヘクタールで一七％を占めています。

一方、成田・桑原・鬼柳地区には現在市街化調整区域ですが、将来工業団地を造成しようとする特定保留区域があり、これを取り込んで都市的土地利用を図る区域に区分されています。

また、曽我山丘陵地は、水資源を確保するために一部保安林の指定がされています。

＊産業

産業別就業者の割合は、第一次産業が九・二％、第二次産業が四一・九％、第三次産業が四八・九％です。特に第一次産業が市平均の四・九％よりも多くなっています。これは、市街化調整区域が約八三％を占め、平野部には優良な水田や果樹園が、曽我丘陵地にはみかんや梅を主体とした果樹園が広がっていることによるものと思われます。

酒匂川左岸沿いには、大規模工場や卸商業団地、木工団地などが立地し、工業系の特定保留区域が二か所あります。

国道二五五号沿道には、沿道立地型商業が立地し、下曽我駅東口周辺にも商店が立地しています。

＊公共施設の状況

特徴的な施設としては、現在建設中の総合公園のほか、豊川に学校給食センターがあります。

そのほか、小学校が四校、中学校が一校、市立保育園が四園、郵便局が三局、警察駐在所が四か所あります。

＊コミュニティ意識

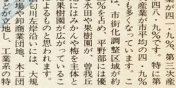
市民アンケート調査の回答結果では、「サラリーマン」家庭が多くなっていますが、従来からの住民層も多く、近隣関係では「親密なつきあい」が比較的高くなっています。

しかし、生活環境面での評価は隣接する川東・南部地域と比較してかなり低く、地域活動については、「時間や暇がない」など消極的な割合が五割を越え、参加意向も全市で最も低い地域となっています。

地域の課題

曽我丘陵一帯は、産業振興や環境整備による地域の活性化が計画されていますが、平野部も優良な農地が展開し営農意欲も高く、今後とも農業的利用を推進していく必要があります。

住居地については、宅地化の拡大に伴い曽我・下曽我地区での水の安定供給をはじめ河川の浄化など生活環境の整備が必要となっています。


下曽我の区画整理地内を見学

酒匂川左岸の成田・桑原・鬼柳地区一帯には、工業団地を造成しようとする計画が進んでいますが、この工業団地の物流の円滑化と国道二五五号の交通混雑を解消するための酒匂川左岸道路と市街地へ流入する通過交通をう回させるための外環状道路が計画されており、その早期実現が待たれています。

また、近隣関係は比較的良好ですが、地域活動への参加意識は比較的低い地域となっています。

地域の方向性

＊将来イメージ

田園風景や曽我丘陵の緑と良好な住宅地、そして公害がなく景観に意を配した工業地帯とが調和した、のどかでいこいとうるおいが感じられる地域の形成を目指します。

＊望まれる対策

(1)「梅の里づくり」の推進
曽我丘陵と曽我梅林を中心とした「梅の里づくり」を推進することによって、観光レクリエーション機能の向上と生産基盤の整備を図ることが望まれます。

(2)スポーツ・レクリエーションの場の形成
総合公園の建設とともに、「梅の里」と酒匂川の連携を図り、スポーツ・レクリエーションの場の形成を図ることが望まれます。

(3)農業と住環境との調和
農業生産環境、住環境両面の向上と調和を図るため、優良農地の保全と生活基盤の整備が望まれます。

(4)工業地の整備
地理的立地条件を生かして、周辺環境と景観に配慮した新たな工業地を整備することが望まれます。

(5)道路網の整備
幹線道路及びこれらと連携した生活道路網を周辺環境に配慮しながら整備することが望まれます。

(6)河川アメニティの向上
酒匂川をはじめ中小河川の浄化を進めるとともに、親水機能の向上を図ることが望まれます。

(7)地域活動の推進
地域のコミュニティ意識を一層高めるとともに、地域活動の拠点となる施設を整備することが望まれます。

橘地域

地域の姿

＊歴史的歩み

橘地域は、平安時代末期には中村郷に属し、小竹・殿ノ窪に居館を構えた豪族・中村宗平の支配にありました。この中村氏一族は、源頼朝の鎌倉幕府の創建に多大な貢献をし、鎌倉時代には全国に散って繁栄しました。

その後、室町時代中期には中村氏は衰亡し、小田原に本拠を構えた大森氏の領するところとなりました。以後、中村郷は上中村郷と下中村郷に分かれたらしく、中村川下流域のこの地域は下中村郷となり、戦国時代は後北條氏、江戸時代に入り大久保氏の支配するところとなりました。

しかし、慶長十九年（一六一四年）大久保忠隣の改易に伴って、本地域内の前川・羽根尾・中村原・小船・上町・沼代・小竹の各村は、江戸時代を通じ、小田原藩領、幕府直轄領、旗本領等、各々異なった領主に分散されて支配を受けました。

明治時代に入ると小田原藩領から小田原県、足柄県、さらに神奈川県の所管となり、明治十七年（一八八四年）には前川と羽根尾の二村と、中村原・小船・上町・沼代・小竹の五村による二つの戸長役場が生まれました。それが、明治二十二年（一八八九年）の町村制によって前羽村、下中村の二村となりました。

その後、昭和三十年（一九五五年）の町村合併促進法によって二村が合併して橘町となり、さらに、昭和四十六年（一九七一年）に小田原市に合併して、現在に至っています。

落葉の沼代桜並木を探訪

＊地形的状況

この地域は、西は曽我丘陵、北は中井町、東は二宮町に接する台地に囲まれ、南は傾斜地となって相模湾に落ち込んでいます。地域の東部を中村川が南北に縦貫して流れ、その流域はおおむね平坦地で田畑がありますが、そのほかは丘陵地で山林と果樹園になっています。

気候は西北部の曽我丘陵で冬季の寒風がさえぎられ、海に面していることから温暖で、古くから柑橘栽培に適した地域であり、延喜年間（九〇一～九二二年）に相模国から朝廷に献上したというみかんは、本地域の産物であったろうといわれています。

地域の特性

＊人口

人口、世帯数とも増加傾向を示しており、昭和三十五年から六十年の二十五年間に、人口は一・六倍、世帯数は二・四倍になりました。特に、昭和五十年以前の人口及び世帯数の伸び率は、本市の平均よりも下回っていましたが、以後市平均を上回る増加率を示すようになっています。

一世帯の平均人員は、三・八人で、市の平均人員の三・三人より多くなっています。

年齢別では、老年人口比率は九・五％で、市平均の九・九％とほぼ同じですが、年少人口比率は、二三・一％で市平均の二一・一％より多く、比較的若い人が多い地域といえます。

人口密度は、国道一号沿い、橘団地がヘクタール当たり六十～百人ですが、その他の地区は六十人未満となっています。

＊土地利用

この地域は、国道一号沿い及び県道松田羽尾線や中村川沿いの平坦地を除いてほとんどが丘陵地で、田や畑などの農地が四六・八％、山林が二七・四％を占めています。

丘陵地一帯は、優良農地として利用するために農業振興地域及び農用地に指定され、農業的土地利用を図る区域に区分されています。

市街化区域は、約一五七ヘクタールで、地域の一七％を占めていますが、周辺の一部を取り込んで、都市的土地利用を図る区域に区分されています。

また、海岸一帯は海岸保全区域に指定されています。

＊産業

産業別就業者数の割合は、第一次産業が一二・四％、第二次産業が四一・一％、第三次産業が四六・五％ですが、特に、第一次産業に就いている人の割合が市平均の四・九％よりも多くなっています。

農業は、丘陵地でのみかんの栽培が中心ですが、そのほか、この地域の特徴としての畜産も営まれています。

比較的大きな工場の立地も見られますが、数が少ないため、多くの人が他の地域へ働きに出ています。

＊公共施設の状況

市役所橘支所のほか、小学校が二校、中学校が一校、市立幼稚園が二園、郵便局、警察駐在所が二か所あります。

そのほか、特徴的な施設として、前川に福祉館が、小船に老人憩の家があります。

＊コミュニティ意識

市民アンケート調査の回答結果では、居住年数は二十年未満が多く、二十年以上は半数をやや超える程度で、全市の中で最も低くなっています。

これは、アンケート回答者が近年開発された住宅団地の住民が多いことによるものと推測されます。

また、地域の住み良さについての評価は総じて厳しく、定住意識も比較的低いものとなっています。

しかし、地域活動については五五・四％が参加意向を表明しており、片浦地域に次いで積極派が高くなっています。

また、参加している団体も自治会が最も多く、平均よりかなり高くなっています。

地域の課題

小高い丘陵地に囲まれ、相模湾に面していることから、みかん栽培や畜産業が盛んに行われていますが、近年のみかん価格低迷や農産物自由化の動きなど農業環境の著しい変化が予測され、就業の場としての企業等の誘致などを含めて産業対策が必要となってきています。

二宮町境の丘陵地が住宅地として開発され、人口は増加傾向にありますが、それに伴う都市基盤の整備が立ち遅れ、交通面をはじめ生活上の利便性が悪いといえます。

海岸線は砂浜の浸食が見られ、津波や高潮に対する防災対策が望まれています。

また、下中人形座など古くからの伝統文化を継承するとともに、地域活動への参加意識が高いことなどから新しい形でのコミュニティが生まれることが期待されます。

地域の方向性

＊将来イメージ

豊かな緑の中に生産環境と住環境が整備され、コミュニティ活動が活発に行われ、のどかな田園風景に新しい街並みが溶け合った明るく暖かみのある地域の形成を目指します。

＊望まれる対策

(1)農業生産環境の向上
農業生産環境の変化に対応するため、生産基盤の整備向上に努めることが望まれます。

(2)生活の利便性向上
交通の利便性をはじめ生活環境の利便性を向上することが望まれます。

(3)産業空間の創出
自然を活用しながら、地域の就業の場となる新しい産業空間の創出が望まれます。

(4)歴史文化の高揚
下中人形座など、地域の文化的遺産の継承に努めるとともに、地域の伝統と新しい文化を守り育てていくことが望まれます。

(5)道路網の整備
幹線道路及びこれらと連携した生活道路網を周辺環境に配慮しながら整備することが望まれます。

(6)海岸の保全
海岸は浸食及び災害の防止のための整備を促進することが望まれます。

(7)地域活動の推進
地域のコミュニティ意識を一層高めるとともに、地域活動の拠点となる施設を整備することが望まれます。